至仏山東面登山道利用実態調査報告書

(兼 笠ヶ岳・片藤沼登山道及び植生調査報告書)

2001年8月実施

尾瀬自然保護指導員ネットワーク

平成１３年１１月

至仏山「東面登山道利用実態調査」報告書

（兼 笠ヶ岳・片藤沼登山道及び植生調査報告書）

尾瀬自然保護指導員ネットワーク
代表　高橋　喬
担当幹事　永島　勲

はじめに

至仏山東面登山道は、植生の保護・登山道の整備・植生の復元等の理由で、平成元年から閉鎖されていましたが、平成９年８月１日に９年ぶりに再開されました。

ネットワークでは、平成９年８月に第１回調査を行い、平成10年７月・平成11年７月及び平成12年８月に実態調査を継続し、登山道再開における問題点を指摘してきました。さらに、残雪期の登山道閉鎖期間中（５月中旬～６月末）の利用実態調査も平成10年５月に実施いたしました。

至仏山は蛇紋岩という特異な地質により、森林限界は１７００メートルと低く高山植物の宝庫としても知られています。さらに、至仏山は交通の便も良く折からの登山ブームと深田久弥の日本百名山としても有名で、年々登山者が増加しています。このため、登山道を外れて歩く入山者の踏み付けによる植生の破壊や裸地化の拡大と安易な入山による事故が毎年発生しています。

８月４日（土）は、あいにく朝から「雷雨」であったが、再開５年目（５年連続）の実態調査は当初の予定通り実施いたしました。さらに節目の年として、翌日の８月５日（日）はネットワークとして初めて「笠ケ岳」・「片藤沼」周辺の登山道の整備状況や植生の状況等の調査を行いました。

以下、平成１３年度の至仏山東面登山道利用実態調査結果と笠ヶ岳の登山道及び植生の調査結果を報告いたします。

記

Ⅰ、実施日　平成１３年８月３日（金）～５日（日）
　８月４日：至仏山東面登山道を調査　／天候：雷雨のち曇り
　８月５日：笠ケ岳・片藤沼を調査　／天候：霧のち晴れ

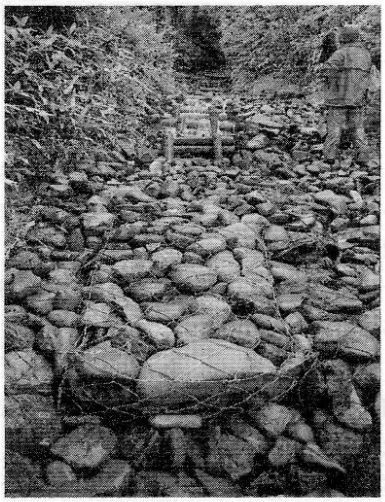
Ⅱ、調査場所　①至仏山東面登山道（至仏山頂～山の鼻　2.9Ｋｍ）
　調査時間：鳩待峠発 7:45～山の鼻 9:05～至仏山 11:40～鳩待峠着 15:20
　②笠ケ岳登山道（オヤマザワ田代～片藤沼～笠ケ岳　６Ｋｍ）
　調査時間：鳩待峠発 6:20～オヤマ沢田代 7:50～小笠 8:40～山頂分岐 9:20
　～片藤沼 9:40～笠ケ岳 10:20～オヤマザワ田代 12:45～鳩待峠着 13:55

Ⅲ、調査者　永島　　勲（埼玉県児玉町）、松前　雅明（福島県郡山市）
本戸　信男（東京都東村山市）、長島　睦世（静岡県下田市）

Ⅳ、調査内容

1．東面登山道の整備状況

今年の調査は、昨年とは逆コースで山の鼻から東面登山道を登り至仏山頂に至るコース設定としました。朝からどんよりとして今にも泣き出しそうな空模様であった。鳩待峠を出発するころには雨粒が落ちてきて、山の鼻に着くまで激しく降り続いた。薄暗い登山道には時折り雷鳴がとどろき、厳しい調査スタートとなった。山の鼻で少し雨宿りして小雨になってから登り始める。東面登山道を登り始めるとまた激しい雨に襲われた。樹林帯の中のえぐられた道（場所によっては１メートル以上も深く掘り下げられている）は、一部ではあるが大小さまざまな石を周りと同じ高さに埋めて、蛇籠のように金網で覆ってあった。このため、濁流に足元を洗われることもなく、昨年と較べると格段に歩き易くなっていた。（右写真を参照）



厳しい自然条件下では、雨水等による土壌の流失で登山道がえぐられて岩石の露出したコースを整備するのは並大抵のことではないと痛感した。東面登山道には、植生の保護や土壌の流失防止用に、金網に石を詰めた「蛇篭」や「板材・丸太」が多数設置されていて土壌の固定化や安定化にある程度の効果は認められるが、その効果は限定的である。

2．植生復元状況（標高１８００ｍの荒廃地：Ｄ地点）

Ｄ地点に到着のころには、幸いも雨が上がり尾瀬ヶ原の一部も見渡せるようになった。「Ｄ地点」下部では丸太や岩で四角に囲まれた僅かな平坦地にはヤチカワズスゲの幼苗に混じって「ミヤマナラ」の実生苗を４株とジョウシュウオニアザミの幼苗１本が確認できました。ミヤマナラの葉は淡い緑色で一番大きい苗で高さ10ｃｍほどに育っていた。（７ページ、写真４－１を参照）

3．入山者の利用実態

中間地点付近で数名の入山者とすれ違うが、蛇紋岩は滑りやすく雨の急斜面に難儀している様子がうかがえた。

高ケ天原の下部付近で再び横殴りの豪雨となって気温も急に下がってきた。濃霧の

ため視界も４～５メートルである。高ケ天原で十数名の中年グループが下ってきたが、いずれも上下セパレート型の雨具で装備等は十分と思われた。スリップに注意しているためか皆、慎重な足運びであった。

１１時４５分至仏山頂に到着。濃霧の山頂には誰もいない。幸い雨が止んだので岩陰で、急いで昼食をとる。風はあまりないが気温が下がってきて寒い。小至仏山への稜線沿いのコースは北西からのガス混じりの強い風が吹きつけていた。

４．笠ヶ岳の登山道および植生の状況

オヤマザワ田代で至仏山へのコースと分かれと急にぬかるみの多いと道に変わる。登山道は、以前（平成６年７月）と比較すると笹も刈り払われて広くなり非常に歩きやすくなっていた。

小笠の南面に僅かに広がるお花畑の植生は特に荒廃された様子は認められなかった最後の樹林帯を抜け笠ヶ岳の東肩の草原に出ると展望も利きお花畑が広がっていた。ニッコウキスゲ・キンコウカ・チングルマ（花穂）などが目立った。笠ケ岳直下の東面のお花畑をトラバースする登山道は、かなり踏み付けられて両側に広がっていた。また、トラバース道へ至るまでの上り坂の登山道の中央部分は２０～３０ｃｍほど深くえぐられていた所もあった。（９ページ、写真２―１を参照）このまま放置するとやがては、雨水や雪解け水により土壌流失が進行し、至仏山と同様に植生が破壊され岩石の露出した登山道になってしまうであろう。

また、西側から笠ヶ岳山頂へ通じる急斜面の登山道は、その下部のガレ場は崩壊がかなり進んでいて、大小の岩石混じりの砂礫が大量に崩れ落ちていた。（11 ページ、写真３－２・３－３を参照）この付近が足を取られて一番歩きにくい場所である。さらに、この急斜面の登山道の中ほどにある大きな岩石も、大雨の時などにはいずれは落下する恐れがある様に思われた。登山者はくれぐれも注意が必要である。

この一帯は、原生自然が豊富なため群馬県の「笠ヶ岳西面野生動植物保護地区」（昭和５２年３月２５日）に指定されている。

この様にまだ豊かな自然が残っている笠ヶ岳は、至仏山と同様、蛇紋岩特有の高山植物も多い。前述の花の他に目にとまった主なものを挙げるとイブキジャコウソウ、チングルマ、ムラサキタカネアオヤギソウ、タカネイブキボウフウ、ホソバヒナウスユキソウ、ミネウスユキソウなどが観察できた。山頂からは３６０度の大パノラマが楽しめたが、緑の山並みの中に楢俣ダムの白い地肌が異様な光景として目に付いた。

片藤沼は山頂への分岐点からなだらかな下り道を２０分ほどで行ける。登山道から南へ１０ｍほどで沼の畔に立てるが、沼の周りへはハイマツと笹のブッシュが濃く近寄れない。当然ながら奥の沼にも行くことは出来ない。当日は天気にも恵まれ静かな湖面には笠ヶ岳が映り、遠くには至仏山と燧ケ岳が望まれ、まさに雲上の別天地であった。

Ⅴ．今後の課題と感想

１．入山者増加への対応

尾瀬は誰でも手軽に行けると思われがちであるが、至仏山の標高は２２２８メートルで、山の鼻～至仏山の標高差は８３０ｍもあり、れっきとした山岳地域である。東面登山道は蛇紋岩という硬く滑り易い急傾斜地にコースがあり、スリップや転倒等の事故が多い。植生保護の外に、入山者の事故防止の観点からも、悪天候時には想像を超える危険があることや高齢者や山慣れない人には極めて危険なコースであることを、入山者や観光業者に対して更なるＰＲが必要であろう。

２．植生復元への対応

東面登山道は急傾斜地に加えてと蛇紋岩という特殊な条件下にあり、雨水による土壌の流失が著しいか、昨年・今年と降雨時の調査となり、自然の厳しさを思い知らされました。従って、流失した土壌の回復と流失防止策を十分にとらないと植生復元は極めて困難と思われる。また、笠ヶ岳でも既に登山道沿いの植生の荒廃が始まっている。至仏山の二の舞にならない様、行政による定期的な調査とそれに基づく保護策の実施が望まれる。

平成９年の至仏山東面登山道の再開は、入山者を迎え入れることを最優先し、植生の保護及び復元を軽視したものと言わざるを得ないと強く感じました。急傾斜地で裸地化した所は、岩石の露出が年々多くなり、このまま放置しておくと植生復元は、一層困難になり、回復不可能になる恐れがあるので、至仏山東面登山道の通年閉鎖と一刻も早い植生復元への本格的な取り組みを強く訴えたい。

まとめ

今年で５年連続（計６回）となる至仏山東面登山道の実態調査を通じて思うことは、急斜面で止まることのない土壌の流失と遅々として進まない植生復元作業など、難しい課題が山積しています。一方、残雪期の登山道閉鎖の継続実施や入山者の減少など明るい動きも見られるが、私達はこの貴重な尾瀬の自然を後世に伝える義務と責任があります。

また、今回初めて調査した笠ヶ岳は山頂東面のお花畑の登山道においては、踏み付けによる裸地化や登山道の左右への拡大、さらには山頂直下西側から山頂へ通じる急斜面の登山道では登山者によると思われる崩壊がかなり進んでいた。

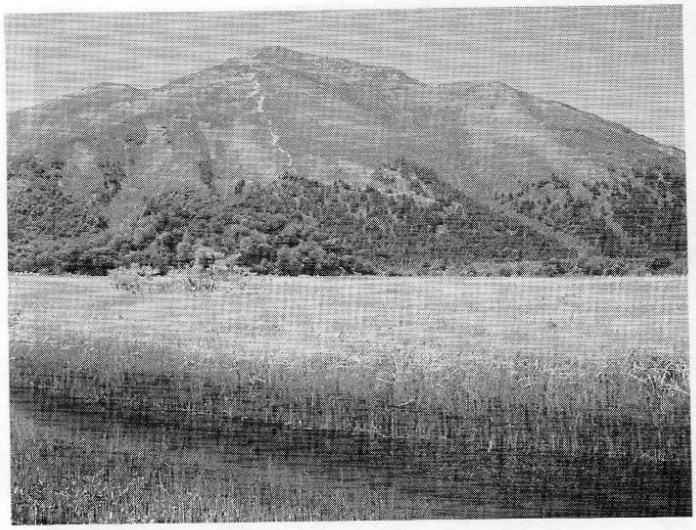
「特別保護地区」並びに「特別天然記念物」の指定を受けている貴重な尾瀬の自然を、これ以上荒廃させてはならない。尾瀬の生態系を保護することを最優先にした抜本的な施策（マイカー規制の強化、登山道閉鎖、入山規制等）が、一刻も早く着実に実施されるよう願ってやみません。

以上

至仏山東面登山道荒廃の現状

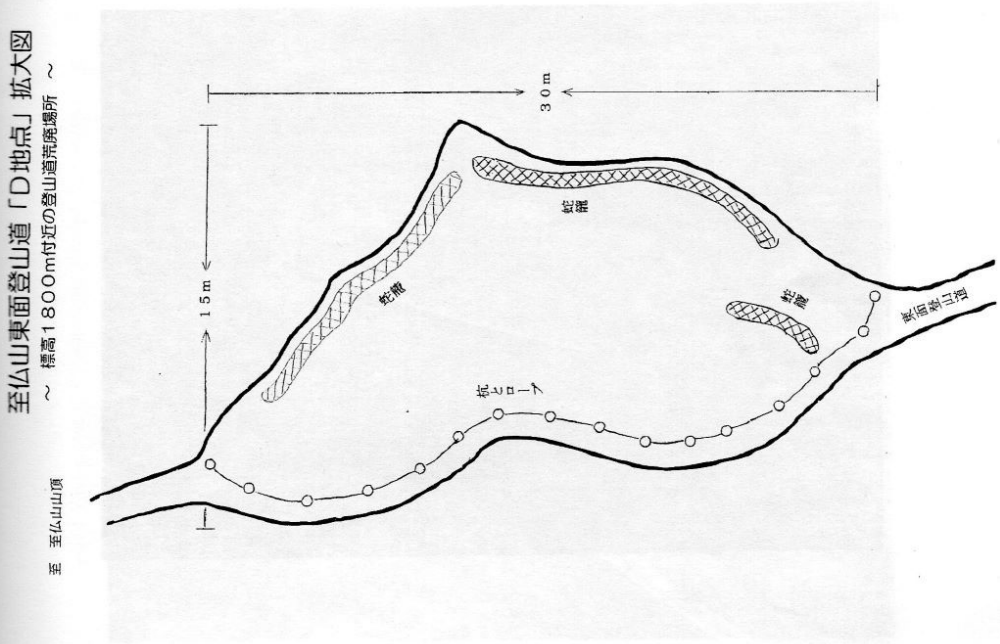
２００１年８月４日調査

１．至仏山東面登山道の全景（尾瀬ヶ原・中田代より望む）



山頂より山麓（山の鼻登山口）にかけて茶色の帯の登山道が見える

２．至仏山東面登山道「Ｄ地点」（標高１８００ｍ）の拡大図



3.至仏山東面登山道「D地点」（標高 1800m）の全体

3-1.　D地点の下部より上部を望む

3-2　D地点の上部より下部を望む

4. 至仏山東面登山道「D地点」（標高 1800m）の植生復元状況

4-1.　D地点下部の植生復元状況

ヤチカワズスゲの中にミヤマナラの実生苗 4 本とジョウシュウオニアザミの幼苗が 1 本見える。

4-2.　D地点上部の植生復元状況

板材・丸太・緑化ネット・蛇篭・岩石などを利用して土壌の流出防止を図っているが、急傾斜地のためその効果は限定的で、植生復元は極めて困難な状況となっている。

5. 至仏山東面登山道「D地点」（標高 1800m）の荒廃状況

5-1.急斜面のため雨水で表土は流出し更に荒廃が進む

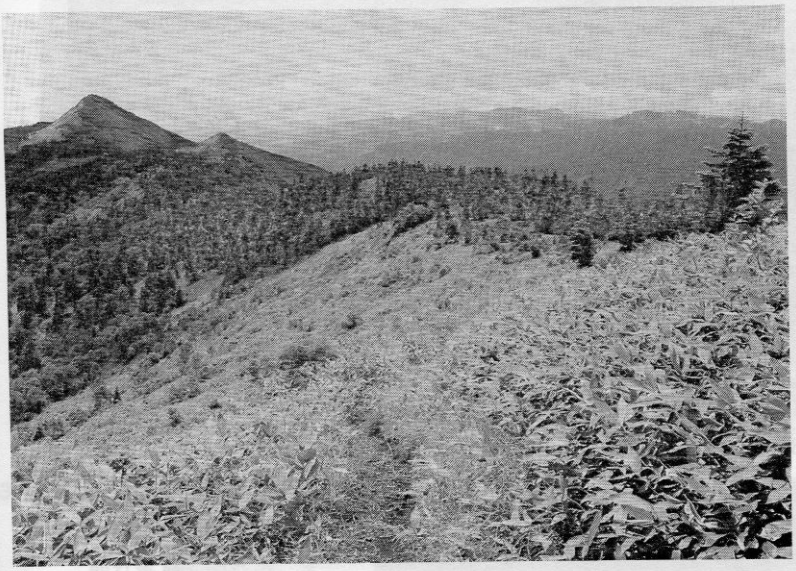
2　土壌は完全に流失し、林床より１　５m以上もえぐられて蛇紋岩が露出
いる登山道（D地点の上部）

「笠ヶ岳」登山道の状況

尾瀬自然保護指導員ネット

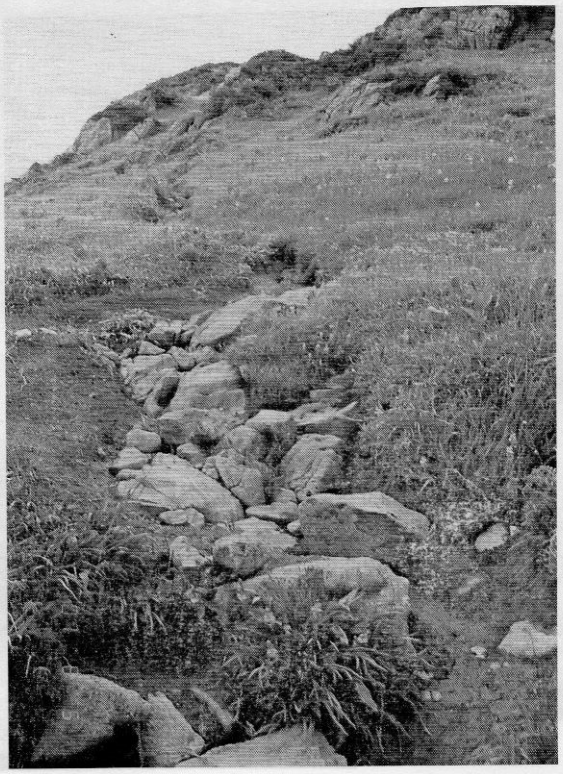
２００１年８月５日調査

1．笠ケ岳および小笠の遠望（悪沢岳付近より望む）

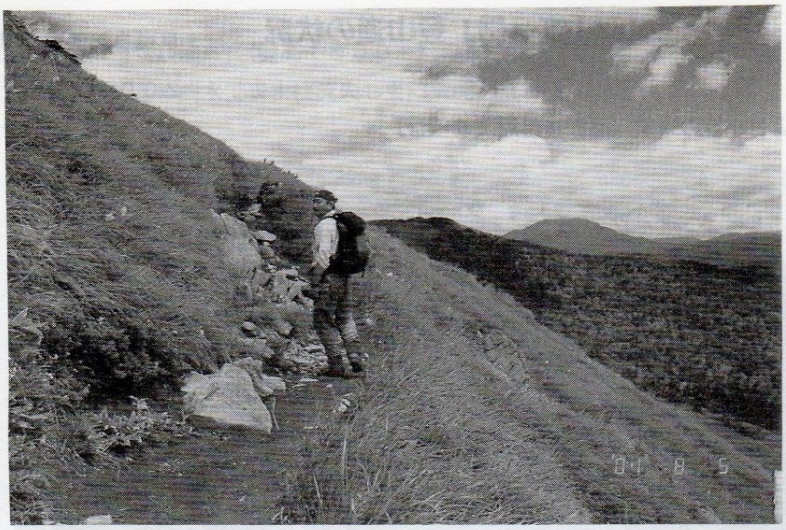


2．山頂直下の東面登山道

２　１　一部では植生が破壊され登山道が左右に拡大し始めている

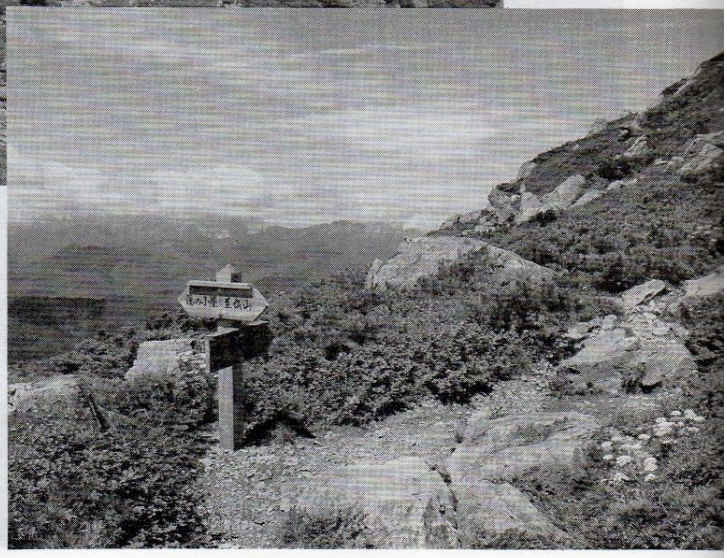


２　２　山頂直下のトラーバース道は急斜面のお花畑となっている（バックの山は燧ケ岳）



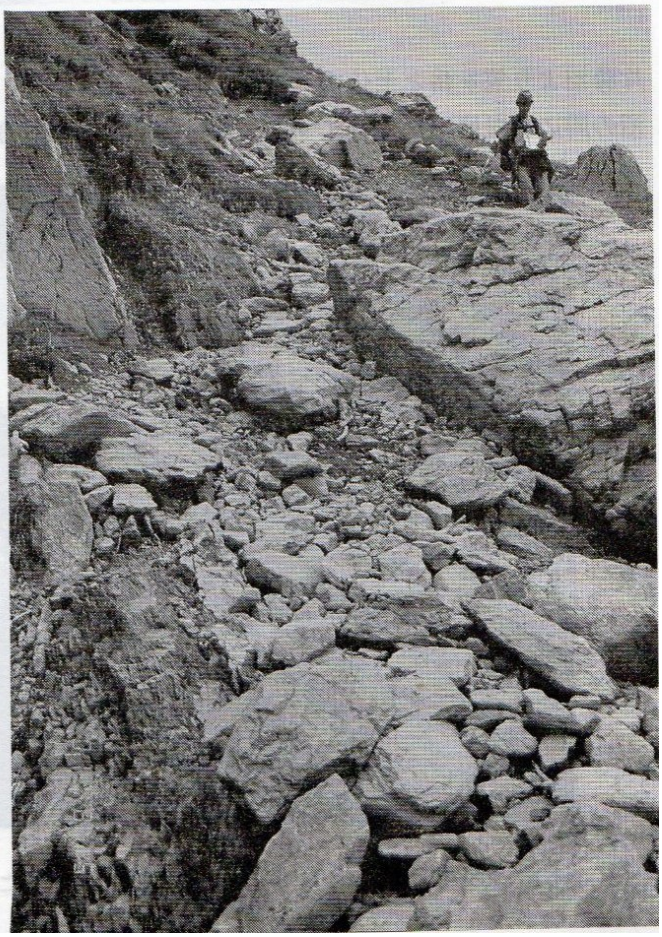
分岐より山頂への登山道

３－１　分岐の道標と分岐付近より山頂部を望む

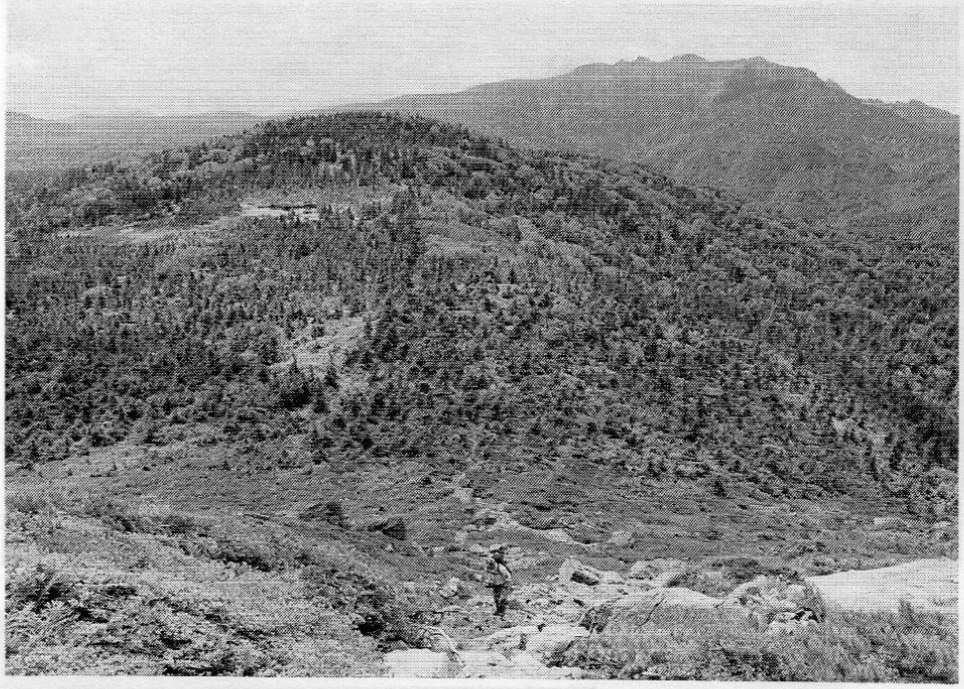


2　山頂への登山道（中間付近）
植生が破壊され登山道の拡大が始まっている

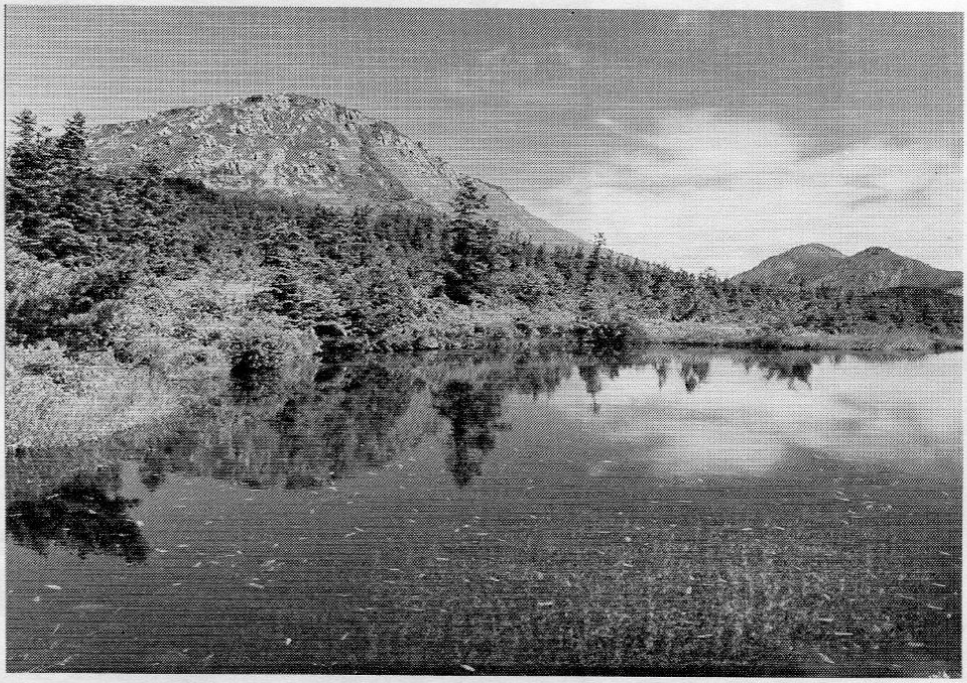
3　山頂への登山道（下部付近）
大小さまざまの岩石が
崩れ落ちているが、ま
だ土壌は残っている



片藤沼遠望（笠ヶ岳山頂付近より、バックの山は上州武尊山）
２０００メートルの稜線上に浮かぶ片藤沼はまさに雲上の別天地である

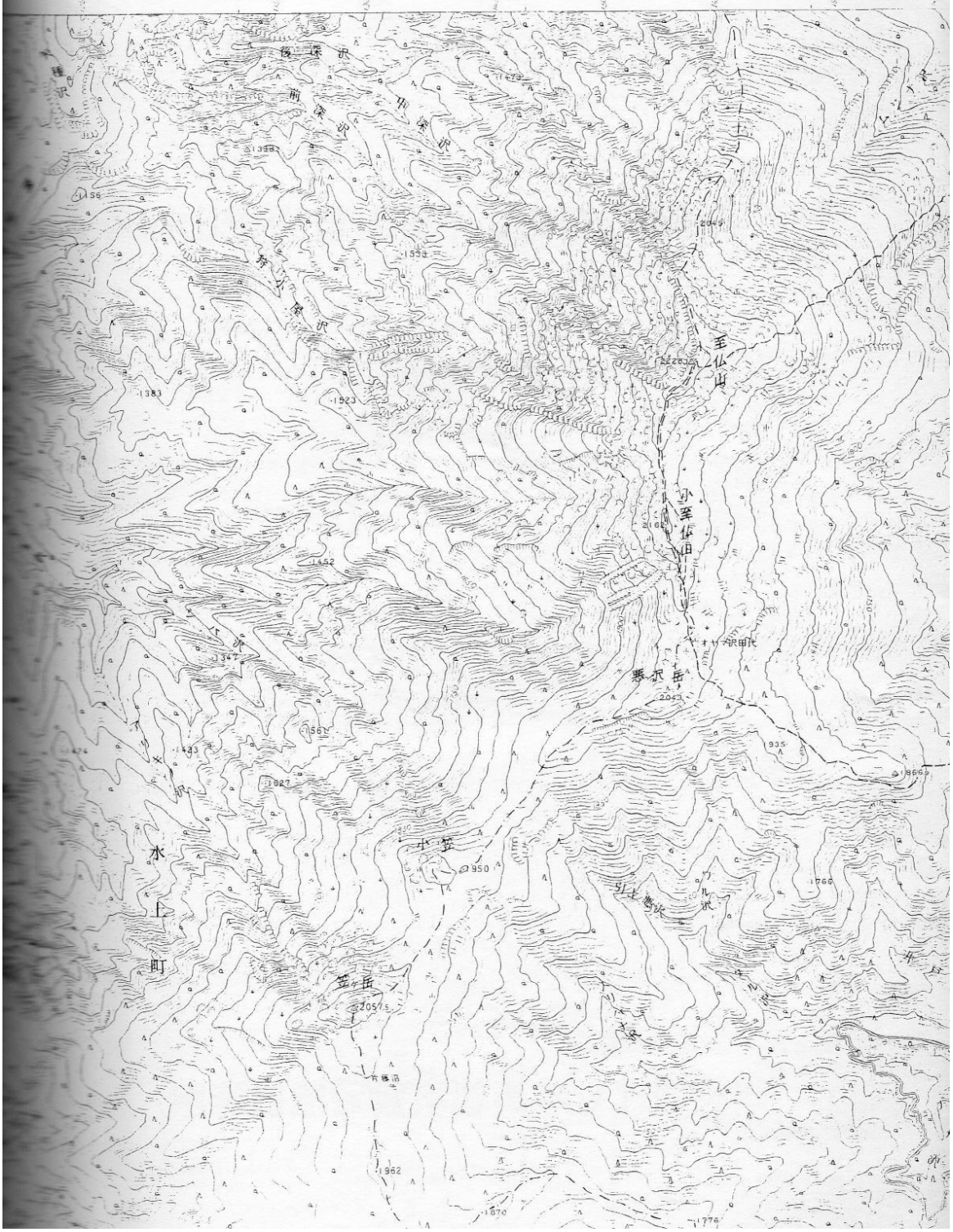


片藤沼より笠ヶ岳と至仏山（右奥）を望む
沼の周辺に湿原はなくハイマツ・笹・潅木に覆われ登山者の進入を拒んでいる



沼の水深は浅く５０～６０ｃｍ程度で透明であった

-54-29　5 2
(日光 5号-2)

至 仏

尾瀬ヶ原